

西表島の森林の保健休養機能に関する研究 (II)

— 森林資源の特徴および保健休養施策の検討 —

琉球大学農学部 新 本 光 孝
砂 川 季 昭

はしがき

前報では、西表島の概況、森林レクリエーション利用者の分析をおこない、さらに琉球大学農学部学術報告第22号、23号では、保健休養資源の特色、森林保護の状況、観光企業の進出状況、森林レクリエーション・エリアの特徴などについて明らかにした。

本報では、西表島の森林資源の特徴や、さらにこれまでの研究成果にもとづき、同島の保健休養施策の基本方針などについて報告する。

調査方法

西表島の森林レクリエーション・エリアは東部、西部ともに若干のコースがあるが、この調査では、同島において利用者のもっとも多い仲間川・ゴザ岳ルート（東部）、浦内川・テドウ山ルート（西部）を対象にとりあげ、これら流域の森林植生の調査を実施した。すなわち、河口から中流船着場までは、ボート上から遠望し、出現する樹種を観察し、さらに船着場よりゴザ岳、テドウ山々頂までは沢、中腹、山頂の三段階にわけて調査をおこなった。なお、森林の保健休養施策の基本方針は、島の現状を把握し、とくに森林レクリエーション利用上の問題点を調査した。

結果および考察

1) 森林資源の特徴

西表島の森林は¹⁾、熱帯林と亜熱帯林とに大別され、さらに熱帯林はマングローブ林、海岸乾性林、熱帯広葉樹林にわけられる。島周辺の低平地および河川の流域は、熱帯林でおおわれ、丘陵地および山の中腹以上は亜熱帯林を構成している。

マングローブは、とくに、森林レクリエーションの中心地である仲間川、浦内川、クイラ川などの下流部、河口一帯および船浦湾の周辺部には相当大面積の群落が見られる。

これらの群落の構成には、一定の秩序ある変化が観察される。例えば、東部の仲間川では河口からマヤブシキ、ヤエヤマヒルギ、オヒルギ、メヒルギの順に、

西部の浦内川ではヤエヤマヒルギ、オヒルギ、メヒルギの順に単生または混生して出現する。マングローブ地帯は、潮の干満によって呼吸根、支柱根が地表面に露出したりまたは水中に没したりして異彩を放っている。しかもこれらマングローブの樹形や根の形態はそれぞれ樹種によって異なっており、すぐれた景観を呈している。また海岸湿地帯にはサキシマスオウノキ、サガリバナ、オオハマボウ、クロヨナ、フトモモなどの熱帯の広葉樹の群落が旺盛な生育をし、なかでもサキシマスオウノキは板根の生成に著しい特徴が認められる。

海岸乾性林の代表的な場所としては、西部の船浦湾の海浜があげられる。現在、同海浜の大半は琉球大学農学部付属熱帯農学研究施設の学術参考保護林に指定されているが、同海浜の主要な植物は、ハスノハギリ、クロヨナ、コバテイシ、アカテツ、モンパノキ、クサトベラ、アダンなどがあげられる。さらに砂地にはゲンバイヒルガオが繁茂し、一見、海浜自然植物園の景観を呈している。

山岳部の山ろく地帯から中腹部をえて山頂へ至るまでの森林をゴザ岳中腹部についてみると、樹種構成は55種にもおよび、材積歩合で亜熱帯林の代表的樹種であるオキナワウラジロガシ、イタジイ、タブノキ、モクタチバナが全体の約70%を占めている。この地点は、同島の亜熱帯林の極盛相と思われる典型的なオキナワウラジロガシ群落で、高木層はオキナワウラジロガシ1種の構成となり、胸高直径約1m、樹高約18mの巨木が点在し、巨大なクローネを張っている。しかもこれらの巨木には熱帯植物のオオタニワタリが着生し、さらにツルアダンやハブカズラなどがからんで上部に達して見事な森林美をほこっている。

亜熱帯林は、山頂にいたるにつれて種類を減少し、樹木の形態は矮性化しており、ゴザ岳、テドウ山などの山頂部では灌木状のシバニツケイ、オキナワジャリンバイ、イタジイなどが出現する。なお、これらの山頂にはリュウキュウテクが繁茂し、これが優占種となって西表島の山頂を特徴づけている。

以上にみてきたように、西表島の森林は構成樹種の

多様性、複層的構成および標高位置における植生の変化などが大きな特徴である。さらにマングローブの樹形、支柱根、呼吸根、ガジュマルの気根およびサキシマスオウノキの板根などの特異な景観は、保健休養の機能を十分に果たしうるものと思料される。

2) 保健休養施策の検討

西表島は遠隔地で、しかも離島であるため交通条件には恵まれず、保健休養施設も皆無の状態にあるが、入域者は年々増加の傾向にあり、吸引圏をほぼ全国的に広げている。そのため、森林を中心とする保健休養施策の検討を急がねばならない。そこで、まずその基本要件となる森林レクリエーション利用上の問題点をとりあげる必要がある。

西表島は豊富な資源に恵まれながら、現状は過疎化が進み孤島そのものである。このように人口が減少し、低開発化した理由は、過去のマラリア、交通の不便および行政の立遅れなどがあげられる。したがって、こ

の島の現状を打開するためには、まず道路、港湾、飛行場、通信、教育、医療、水源開発などの公共・社会施設の整備が急務である。とかく、同島の「開発か自然保護か」の問題は、二者択一的に論じられることが多く、場合によっては両極端の見方になって論じられることもしばしばである。しかしながら同島の現状は、簡単に二者択一では割り切れないものがあり、それ以前に手を打つべき問題があまりにも多い。したがって今後の島の振興のためには、地元住民の生活向上、福祉の増進等を最優先することが前提とならなければならない。このことは保健休養施策の基本方針においても全く同様であって、豊富な保健休養資源に恵まれながらほとんど開発利用されていないのが実情である。幸い、沖縄県の離島振興計画が実施されつつあるが、その中間報告における同島の施設整備計画は表一のとおりであって、これらの施設の一日も早い整備が期待される場所である。

表一 西表島の施設整備計画

広域基盤施設	生活産業基盤施設	生活環境施設	防 災
ヘリポートの設置	水源の開発・貯水	ゴミ焼場の整備	護岸・河川改修
空港の整備	24時間給電	各戸浄化の推進	その他
地方港湾整備・増便	島内一周等主要道整備	医療巡回サービス等強化	
ダイヤル自動化		診療所の新設強化	

最後に、森林レクリエーションにあたっての利用上の得失について指摘したい。

(1) 島の森林レクリエーションの最大の魅力は、マングローブ林や熱帯・亜熱帯の植物群落、それにサンゴ礁を主体とした海岸線の景観にある。そのため、同島を利用するにあたっては「森と海」を有機的に結合させ、あるいは連帯性をもたせる必要がある。

(2) レクリエーション利用者の安全性の確保は、もっとも重要なことであって、そのためには、船着場、遊歩道、案内標識、解説板、指導標などの休養施設の整備が必要である。

(3) 島には人畜に咬傷を与え、あるいは寄生吸血する数種の有害動物が生育している。すなわち、サキシマハブ、イワサキカレハガ、オオムカデ、毒グモなどの有毒動物、ヤブカ、ダニ、ヤマヒルなどの吸血動物で、そのため森林および河川沿いでのキャンプは禁止

するなどの対策を考える必要がある。

(4) 仲間川では、潮の干満によってモーターボートの運航が著しく左右されるので、横断道路の活用を考慮すべきである。

以上、西表島の森林資源の特徴および保健休養施策の基本方針について述べてきたが、同島の森林の保健休養機能を十分に果たさせるためには、上述の特徴を十分に発揮させるとも、前述した利用上の問題点を解決すべきである。

引用文献

(1) 総理府特別地域連絡局：西表島農業調査報告書 第1編 西表島の概況、67～70、1960

(2) 厚生省国立公園部：沖縄諸島自然公園調査報告 4～8、1970